

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 塚本 聡

研究課題		英語史的コーパスを用いた言語変化の数量化
報告の概要	研究目的 および 研究概要	英語史的コーパス (YCOE, PPCME2, PPCEME, PPCMBE) を利用し、英語に生じた言語変化の生起数を観察し、言語変化の速度に共通する特性がみられるのか否かを調査した。個別の言語変化については、すでに先行研究で調査されているが、言語資料を統一し、資料による差異を除去することを目的に、同一コーパスから各種文法項目の生起数を調査した。
	研究の結果	PPCME2, PPCEME を中心に 8 種類の言語項目について、コーパス内の生起数をカウントし、その生起数、対立する構文との生起比率、類似の構文との生起率の差、という定量的なデータに基づき、言語項目の変化速度を測定した。コーパスからのデータによると、結果的に定着した言語変化はおおよそ 200 年から 300 年で変化が完了しているのに対し、定着しなかった変化は、増加開始後 50 年くらいの後生起率が減少し、70 年から 125 年程度の後には言語変化としては消滅し、現代には残存しなくなった。
	研究の考察・反省	今回調査対象とした言語項目は、非人称動詞、進行相、準動詞などの動詞に関する項目と、名詞の属格語尾変化、限定詞、および比較級・最上級などの形容詞・副詞にかかわる項目を中心に調査を行った。統語的な側面から言語項目を選定したため、全体として動詞に関する項目が多く、対象となる言語項目にはやや偏在がみられた。より一層の普遍化を図るには、各品詞横断的に調査を行うこと、また、語形成や音韻論に関わる面からもアプローチする必要があるであろう。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 英語コーパス学会 第 44 回大会 英語史的コーパスによる言語変化の測定 2018 年 10 月 6 日 (土) 東京理科大学 (神楽坂キャンパス)	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	Book Review: Irma Taavitsainen, Merja Kyto, Claudia Claridge, and Jeremy Smith eds. <i>Developments in English: Expanding Electronic Evidence</i> . <i>Studies in Medieval English Language and Literature</i> : 33, 67-72. 2018 年 7 月 31 日 日本中世英語英文学会	